蛇平開拓地における新規水田造成とその意義

長谷川 典 夫

磐梯山北麓、小野川湖南側の泥流地域に位置する蛇平は、1944年周辺集落より22戸が入植した典型的な高冷開拓地である。近年新規水田の造成と既成耕地の放棄がみられ、生産構造に変化を生じたので、その実情を記し、水田造成の意義に注目しておくたい。

蛇平では、当初小野川・五色沼入口間の道路添いが主に開拓され、雑穀作を主とする畑作が行なわれ、その後わずかの水田が付加されていた。しかし標高760～800メートルの開拓地では低温・日照不足など気候的にも、また泥流地域特有の巨礫が多く極浅土層であるなど土壌の点でも、作物の育成条件が劣悪であり、耕地化が困難なうえ生産力も低く、兼業は必須の要件であった。

1958年の国の開拓事業実施要領の改訂に対応して、当地区の営農型も転換してゆく。すなわち、開拓組合は五色沼入口に近い所有地を観光用地として売却し、その資金約1200万円をもって貯水地を新設し、小野川湖南南岸に約10haの水田を機械開墾により造成し、1960年より水稻栽培を開始した。1戸当り面積は50a程度に過ぎず、生産力も10a当り2～2.4石と低いが、これによって自給がほぼ可能となった。1戸当り2ha以下の畑地には、なたね・たばこ・ばれいしょ・雑穀などが栽培され、換金作物の意義は少なくないが、生産力は低い。既成耕地は、1963～64年に家屋の移転集場の場に提供されたほかは、新規水田造成後放棄されたままのものが多く。一般に農作業は農繁期のぞき女子労働に依存し、男子は国有林労務や出稼に従事して家計費の半ばを得ているが、

水田造成前後でこの事情は変わっていない。

以上のように、時の農業政策を背景とし、機械開墾の導入によって新規水田を造成した蛇平では、一方では既成不良耕地を放棄し、一度導入した酪農も牧草の生育不良や牛乳の出荷条件の不良のため廃止し、現在の営農の基幹は水田経営にあるが、一方では兼業の果す役割もまた極めて大きい。従って蛇平では、品種の改良・稲作技術の進歩・機械開墾方式の導入などを前提としながらも、経済的基盤が弱体な開拓農村であるからこそ自給度の高い米作指向の欲求が強くあらわれて、水田造成が行なわれたとみるべきであろう。その点では下北半島の野平開拓地（長谷川 1965）の如き低生産力の僻地開拓地と軌を一にするものであって、昭和開墾（福井 1966）や磐梯山南麓の東部開拓地にみられる、自給畑作→畑作+酪農→水田造成による水田酪農という営農基盤の強化に伴う発展型とは意義が異なる。（1967.2.22 受理）

福井英夫（1966）：昭和畑作開拓地における水田造成 東北地理 18 86

長谷川典夫（1965）：下北半島の戦後開拓地 人類科学 17 16～32

New Construction of Rice Fields in the Hebidaira Settlement

Norio HASEGAWA

The Hebidaira settlement at the northern slope of Mt. Bandai, is under unfavourable conditions for farming such as cold climate and poor soils originated from volcanic mud-flows. The farmers carrying on ordinary field farming are so poor that they are in need of side jobs. In 1960, the farmers newly reclaimed about 10 ha of waste land into rice fields and also constructed a reservoir as a new irrigation source. On the other hand, they abandoned their old upland-fields and rice-fields which were less favourable for farming. However, farm economy in the newly reclaimed rice-fields is not always prosperous. It is a different type from the cases of Showa settlement and Tobu settlement.